

(3) 金沢大学宝町遺跡医学部解剖実習棟地点の調査

調査面積	1492 m ²
調査期間	2004年11月9日～2005年3月31日
検出遺構	江戸時代の溝1条・橋、幕末～明治の土坑、その他近代遺構

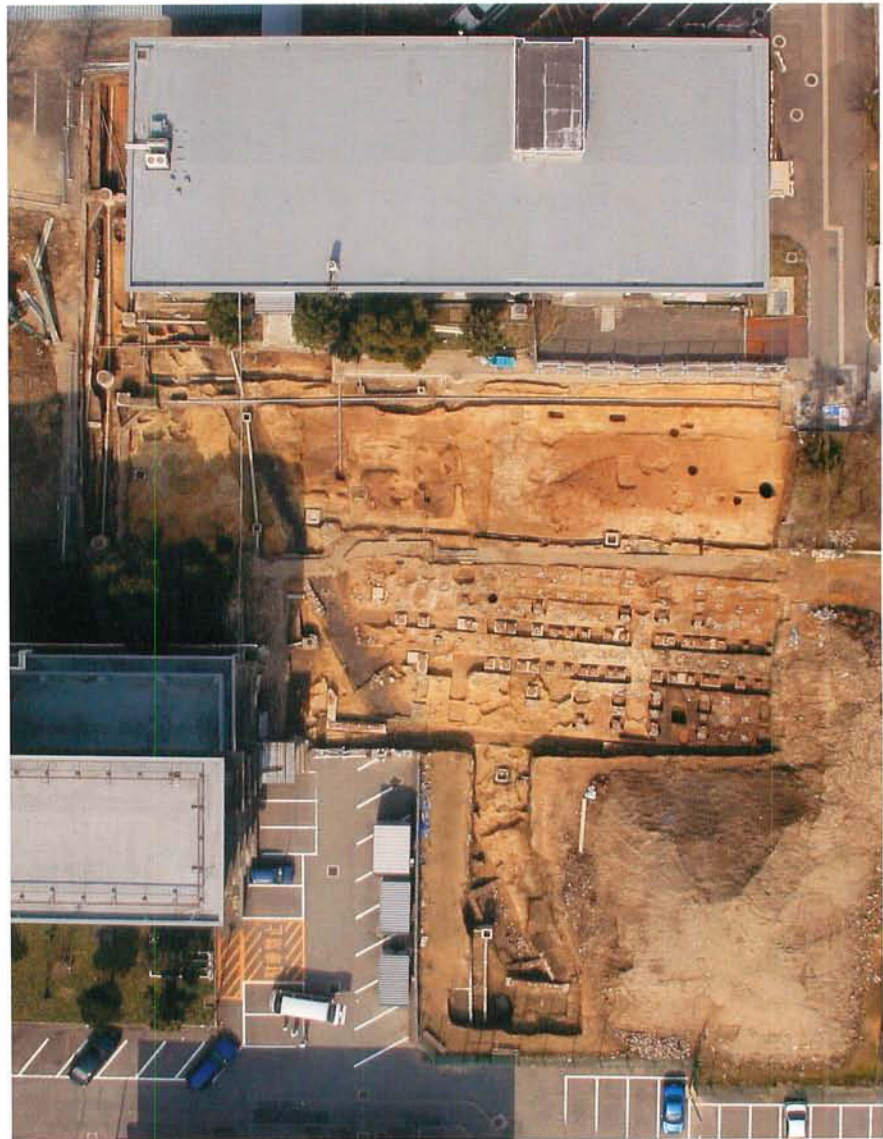
医学校・医学部時代の校舎基礎の他、陶磁器を含む多くの土坑を発見した。また江戸時代の絵図よりこの地は与力町と経王寺の地境であることが想定されていたが、実際に経王寺を巡る溝の一部、長さ70m分を検出した。溝は南北方向でやや東に傾き、遺構上部の幅が約3mである。溝底は南側へ傾斜し、新旧2時期（部分的には3時期）に分けられる。溝の南部では東側の岸に石積み、中央部では東西両岸に石積みと橋の跡が確認された。溝底に東西3本ずつ計6本の柱穴列が残り、橋の痕跡である。柱穴間隔から橋の幅は約3mである。橋の下になる溝の両岸下部には、土留めのための横板が残っていた。この橋を中央として溝の東側には約15m幅の張出し部があり、経王寺の入り口であったと考えられる。後世の攪乱のため門の痕跡は認められないが、門の礎石と推定される切石（赤色戸室石）が付近に2個転がっていた。

今回発見された溝は旧経王寺の西辺の溝と考えられ、東側が一段高くなった寺域である。他に寺関連の遺構は見つかっていない。宝暦9年以降とされる経王寺絵図（前田育徳会所蔵）^(註)には、寺の四方をめぐる溝や橋、門などが描かれており、検出した遺構の状況とよく似ている点が注目される。

(註) 経王寺『寿福山経王寺誌』2002



調査地全景（東から）



調査地全景（上空から）



溝中央部の門・橋跡
(中央左寄り部分)



溝南部の石積（東から）



溝中央部の橋柱穴と石積・横板（北から）



溝中央部出土木簡



溝中央部の発掘状況（北から）



溝南部の青磁双耳瓶出土状態（北から）